

ご来場のみなさまへ

大田堯

「^{どうろう}蠮螋（かまきり）の斧」

3.11 東日本大震災は、私たちの映画の内容がようやく出来上がった後での衝撃的な出来事でした。多くの生命が失われ、資財も無に化することになりました。人々は「これからどう生きるか」の深刻な問いに直面しています。私は、今回の事態が想定外の自然の力の働きがきっかけとなったとはいえ、原発を含む明らかな人災によるものであると考えています。「これからどう生きるか」の問いは、直接罹災した人たちの問題にとどまることなく、日本人、いや世界の人々への問いかけであると考えます。

今回の罹災の現場では、まず自分の生命をどう守るかの問いとともに、「誰が、どこに」の問いが切実なものとして人々の間にあったはずです。我が子の消息を知ろうと、敢えて引き返して、津波にさらわれたお母さんの出来事には、胸に突き刺さるような衝撃を受けました。生命のきずなのむごい断絶です。

それにつけても思うことは、こうした悲劇的な事実にはるかに先立って、生命と生命のきずなの危うさは、現代社会の現実として、潜在的に日常化していたということです。つまり、モノとカネ優先の社会では、地球上の自然破壊が日々進行し、人間関係はごく身近なところから疎遠になり、互いに自分を見失うという事件が日常生活の中で、次々に発生していたのです。おそらく貧富、生活信条の格差に根ざすテロ、弱者（子どもを含む）への虐待、動機不明の重大犯罪、自殺などなど数えればきりがありません。

今回のような事態の背景には、自然の摂理へのヒトという動物のおごりがあってきたこと、それらに対する深刻な反省なしに、モノとカネによる「復興」がおこなわれたとしても、生命と生命のきずなの危うさは、取り残されたまま、更なる悲劇を招くことになりかねません。

モノとカネの支配下にあるこの現実を、自然から与えられた生命と生命のきずなによるセーフティネットに根ざしたものに建てなおすことは、次世代に対する、私たち世代の責任だと考えます。この映画では、このきびしい現実に対して、できるだけ身近なところから、挑戦を試みる年老いた研究者の夢を描きだしていただくことになりました。

「ちがうこと」「自ら変わること」、そして「かかわること」、およそすべての生きもののそなえた生命の特質を手がかりとして、人間の尊厳、基本的人権を軸とするセーフティネットの創造につなげることで、モノとカネが支配する社会に、何とかくさびを入れる、そういう夢を持ちつづけてきました。その挑戦は、巨人に挑む「蠮螋の斧」にも似た途方もないことなのかもしれません。

これまでのところ、ささやかな一つ一つのころみも成功の手ごたえを得たとまで云えるほどのものはありません。それでも、きびしい現実にとりくむ人々に思いをはせながら、そのかすかな光をめざした一歩々々の中で、快く夢を分かち合う多くの仲間と一日々々を過ごしております。

この映画を通じて、一人でも、二人でも新しい仲間ができることで、残り少ない余生を送ろうと思っております。